パネル

て、北野社の松梅院など菅原姓吉見氏が、それまでの「法体」奉仕を「いなしこめしこめきぶつのみちもてつかえまつりしを」いとも簡単に捨て去って平然としていることに対し、「この一事で、祠官三家以下社僧の態度が知らるゝのである。彼らの内一人も自らこれを異まなかつたのである。……諸坊に、仏教関係の図像等が多かつたが、住持が仏教の信仰がなかつたから、各自ら意に任せて売却したものである。」と評している。

かかる事例は、興福寺、永久寺等枚挙がない。だが、大宮・水川神社や金刀比羅宮などホトケであれ、カミであれ、己の信ずる道のために出処進退を決した宗教者も少なからずいたであろう。

この発表が、神仏分離を招き、そしてその神仏分離の場を様々な形で生き抜いてきた日本人の「宗教性」と生活、そしてその歴史を少しでも実証的に解明できる参考になれば幸甚である。

宗教都市宇治山田における

神仏分離の諸問題

牟禮 仁

伊勢神宮とその鎮座地である宇治(内宮)・山田(外宮)は、仏法・仏事忌避の神祇信仰の伝統性を継承する典型的事例とみられているが、一方、古代後期以降仏法者を引きつけ、また各

地から人々の参詣するセンター・聖地、宗教都市としてあった。そこでの神仏関係には、①信仰②思想③歴史・制度④空間・建物⑤物象⑥人⑦儀礼・祭儀などのレベルで多様な様相があった。そこには二つの志向性があった。神宮側にあつては、マイナス(禁忌・判然・隔離・分離・排斥・排除)の、また神宮側、寺院・僧侶側にあつてはプラス(接近・共存・結合・混濁・習合・融合)の志向性とは併存した。

古代における神仏関係は、奈良時代伊勢大神宮寺が建立されたことに示される神仏接近に始まるが、以降、忌詞・「屏仏法息」(伊勢神道書)など神仏隔離の理念が定まる。一方で、神宮祠官の仏法信仰が十世紀末〜十二世紀には浸透する。また僧侶の参詣、神前読経が盛んとなり、天照大神の本地仏を十一面観音・大日如来とする思想が広まる。

中世では、「隔離」と「習合」とが併存しつつ、祠官側の「習合」の信仰内面化が進むとともに、式年遷宮遂行の勧進に僧侶の関与や修験の参詣・関与も深まる。

近世、人口約五万人のマチの実態は「寺町」といえる。寺院数の最多は、山田では三七一、宇治は七八であった。①宗派の内訳は、明治二年には三一五ヶ寺のうち浄土宗一〇六・禅宗一五七・真言宗三八・天台宗六・真宗六と、浄土宗と禅宗が圧倒的であった。②規模の別を寺号にみると、院・庵・軒・坊・堂などが五〇%と高い。寺院の多くは明確な由緒を有さず、それらは中世後期以降に由来し、近世初期の寺請制度などにより勧進聖(浄土系)・修験者などが定着化したこと、檀那寺より檀家をもたない祈禱寺の割合が多いことが推される。そして「隔

離・分別」の施策が、山田奉行所（幕府）・神宮側・朝廷側（勅使）の意向により、江戸初期（寛文期）と末期（慶応期）に強くなった。

明治維新における神仏分離・廃仏毀釈の過程は、王政復古・神仏分離令が出された慶応四年三月を契機とし、同年七月設置の度会府により施策が同年十月頃から始まり、二年三、四月までの短期間に集中して実施された。内容は、(一)離壇して神葬祭への改宗と(二)僧侶の復正(還俗)が先行し、次いで(三)寺院の廃寺、整理が行われ、明治二年三月時、寺院数二五九のうち廃寺数一八三で、残存率は約三割、(四)仏像・仏具・仏書類の破却が実施された。(三)(四)の契機として二年三月の明治天皇神宮行幸・参拝に先立ち、同年二月、度会府は御通聲神領御参道筋寺院取払を布告し、「今般行幸参拝被為遊候ニ付、神領中参道ニ有之候仏閣仏像等尽取払可申」ことを命じた。

推進者は度会府で、中心人物は府知事橋本実梁、判事元田直、書記・神祇兼市政曹長浦田長民らとなる。彼らの理念・意図は「神国根元ノ土地ナル故、仏法ヲ忌ミ」、「神ノ嫌ヒ給フ仏事ヲ廃止セントスルハ吉事」、「仏寺ヲ廃止セサレハ神領中神仏混淆ノ旧弊再蒞シテ信仏ノ徒絶スヘカラス、然レハ神領中ニテハ敬神ヲ専ラトシテ仏法禁止スルヲ政事ノ第一トシテ可ナリ」とし、また「神州ニ仏法ハ無用之長物ニ候(中略)当地ハ格別之神境ニ有之(中略)此節断然 勅命ヲ以テ宮川内廃寺被 仰出度」とした。

神宮では、仏法忌避・神仏判然の意識・理念が底流にあったが、古代末・中世には「接近・併存」が神・仏双方から進ん

だ。近世になり判然意識・施策が高まり、そして維新に際して中央の施策に応じて神領地での「仏法忌避、仏寺無用」の理念の再認識により神仏分離が厳しく実施された。一方、僧侶の神前参拝許可(明治五年)により、仏法・仏事忌避の理念が曖昧となった面も生じたといえる。

近世における神仏関係

——習合と分離——

澤 博勝

日本の神仏関係の歴史は、その習合の側面はおもに古代・中世の問題として、分離については幕末維新期の問題として、それぞれ別々に論じられてきた。一方、近世に関しては、わずかに神仏分離の前史として論じられるのみであった。このことは、近世の宗教史研究そのものが、他の時代に比して低調であったことと表裏の関係にある。しかし近年、近世国家論や社会論とも結合するかたちで、近世宗教史研究が盛んに行われるようになり、仏教史のみならず神道や陰陽道などの歴史的展開に関しても、その詳細が鮮明になってきた。次の段階として、それら諸宗教の関係性を明らかにし、その歴史的評価を下す必要が生じている。

こうした近世宗教史研究の進展の一方で、他分野の研究者にも大きな影響力を持つ宗教思想史研究が従前の思想分析を展開